

David Lodge's Cat in the Rain

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1996-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 栗原, 裕 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/4224

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



Lodge の猫

栗原 裕

短篇 Hemingway, “Cat in the Rain” の結末で、宿の主人の言いつけでメイドが届けてくれた “a big tortoise-shell cat” はアメリカ人の妻が窓から雨の中に見た猫と同一の猫であるかどうか。同じ猫であるとする読み方と違う猫であるとする読み方とがあることになっている。しかし、これは本当であろうか。この “a big tortoise-shell cat” について 2 とおりの読み方があることになってしまったのには、David Lodge (1980; 1981) に責任があるのではないかと思われる。Carlos Baker (1952) の議論を引いて、その議論が猫の同一を前提にしていると言ったのが Lodge であったからである。

一方、これらの議論を承知した上で、2 匹の猫が同一であるかどうか言語学的には決めることができないとする議論が、大沼雅彦 (1987) によって提出されている。そして、大沼は Lodge がやはり 2 匹の猫の同一性の断定不可能を明言していると読んだ上で、Lodge を激賞している。

しかし、Baker は Lodge の言うような読み方をしていないように思われ、また、Lodge は大沼の言うような読み方から踏み出しているように思われる。けれども、とりあえず以上を並列すれば、メイドが届けた猫について、

- ①アメリカ人の妻が雨の中に見た猫と同じである
- ②アメリカ人の妻が雨の中に見た猫と異なる
- ③アメリカ人の妻が雨の中に見た猫と同じであるとも異なるとも断定できない

の 3 とおりの受けとり方があることになる。

書き手がなにをどのように書くのも自由であるのと同じように、われわれ読み手がなにをどのように読むのも最低限の保証された自由である。けれども、自由に産出されたものは当然評価を（そして、その評価もまた評価を）受けなければならないであろう。以下は、Lodge の議論のうち、メイドの届け

た“a big tortoise-shell cat”にかかわる部分だけに絞って評価を試みようという作業である。

1

Lodge (1980; 1981) は構造主義の理論と手法をもって文学テキストを分析したらどうなるか、その1つの試みを明晰に示したものである。その第1部が構造主義的物語理論の概説、第2部がその実践である。第2部の実践の部は、Christine Brook-Rose (1976, 1977; 1981) が James, “The Turn of the Screw” について試みた議論を規模を小さくして演じて見せるという趣旨であった。

メイドの届けた猫と妻が窓から見た猫が同一であると Baker は考えている——Lodge にそのように断言させたのは、Baker の以下の1節であった。

“Cat in the Rain,” another story taken in part from the woman’s point of view, presents a corner of the female world in which the male is only tangentially involved. It was written at Rapallo in May, 1923. From the window of a hotel room where her husband is reading and she is fidgeting, a young wife sees a cat outside in the rain. When she goes to get it, the animal (which somehow stands in her mind for comfortable bourgeois domesticity) has disappeared. This fact is very close to tragic because of the cat’s association in her mind with many other things she longs for: long hair that she can do in a knot at the back of her neck; a candle-lighted dining-table where her own silver gleams; the season of spring and nice weather; and, of course, some new clothes. But when she puts these wishes into words, her husband mildly advises her to shut up and find something to read. “Anyway,” says the young wife, “I want a cat. I want a cat. I want a cat now. If I can’t have long hair or any fun, I can have a cat.” The poor girl is the referee in a face-off between the actual and the possible. The actual is made of rain, boredom, a preoccupied husband, and irrational yearnings. The possible is made of silver, spring, fun, a new coiffure, and new dresses. Between actual and possible stands the cat. It is finally sent up to her by the kindly old inn-keeper, whose sympathetic

deference is greater than that of the young husband.

(Baker, 1952: 135-36)

Baker (1952) の手法は Hemingway の人物と作品とを混融させて、全体として芸術家としてのヘミングウェイの像を描き尽くそうとするものである。作品の制作年代をほぼ追うようにして、その文学的経歴が描き出される。上の引用は、“The First Forty-Five Stories” と題する第 6 章のなかの、“Many Marriages” と題する節に含まれている。短篇“Up in Michigan”について述べた文章に続く部分で、“Cat in the Rain”にかかわる解説はこの引用部分ですべてである。Hemingway には、「男性の活力がしばしば荒々しく気紛れな発現の仕方をするけれども、それを軸にして女性の世界が回転するように見える」(Baker, 1952: 135) という状況を描く一連の作品が抽出できて、その最初の短篇が“Up in Michigan”で、それに続くのが“Cat in the Rain”であると考えている。どちらも部分的に女性の視点を採用していることが指摘されている。

Lodge は Baker のこの説明について揚げ足とりをしてみたいところがいくつかあると言い、2つの点について検討を加えることになる。そのうちの第 1 の点がいまわれわれの問題にしようとしている点である。Lodge はこう言っている。

Most important perhaps is Baker's assumption that the cat sent up by the hotel keeper at the end is the same as the one that the wife saw from her window. This assumption is consistent with Baker's sympathy with the wife as a character, implied by his reference to her as 'the poor girl' and his description of the disappearance of the cat as 'very close to tragic'. The appearance of the maid with a cat is the main reversal, in Aristotelian terms, in the narrative. If it is indeed the cat she went to look for, then the reversal is a happy one for her, and confirms her sense that the hotel keeper appreciated her as a woman more than her husband. . . .

The description of the tortoise-shell cat as 'big', however, suggests that it is not the one to which the wife referred by the diminutive term 'kitty,' and which she envisaged stroking on her lap. We might infer that the padrone, trying to humour a client, sends up the first cat he can lay hands

on, which is in fact quite inappropriate to the wife's needs. This would make the reversal an ironic one at the wife's expense, emphasising the social and cultural abyss that separates her from the padrone, and revealing her quasi-erotic response to his professional attentiveness as a delusion. (Lodge, 1981: 24)

Baker は宿の主人の届けさせた猫が妻の窓から見た猫と同一であると決めてかかっている。それは Baker が作中の妻に共感していることと無矛盾である。猫が届けられたのは、アリストテレス風に言えば、物語の逆転であり、もし猫が探していた猫であったら、めでたい逆転である。そう Lodge は Baker を読んでいる。わざわざ「もし猫が探していた猫であったら」と条件をつけるのは、Lodge がそうでない可能性を考えているからであり、それが直後に続くパラグラフで示されているのである。そして、われわれもまた Lodge の提出するその読み方をし、その読み方がもっとも適切であると考えている。

しかし、Lodge が言うように、Baker は本当にメイドの届けた猫が妻の窓から見た猫と同一であると考えているのであろうか。この短篇が若いアメリカ人夫婦のあいだの感情の齟齬を主題とした話であることは、平均的読者にとってまず読み取りそこなうことがないであろう。異国の行楽地で雨に降り込められて所在ない。夫は読書ばかりしていて相手をしてくれない。しかし、妻にとってはどうもそれだけではないらしい。このときまでに、すでに妻の欲求が抑え込まれるという事態が蓄積していたらしい。その根幹にある原因と理由は明示されていないけれども、妻の欲求不満が爆発して口ばしる妻のことばに、その片鱗はうかがい知ることができる。Baker の記述のとおり、妻はつぎつぎと欲求を口にす。

- ①髪を伸ばして頭のうしろで結び目を作りたい
- ②燭台に灯をともして自分の銀の食器で食事をしたい
- ③季節は春、天気は晴れになってほしい
- ④新しい衣服を着たい

Hemingway の原文に付けば、まず、髪を長く伸ばしたいとおずおずと口

にすると、即座に今のままがいいと言われてしまう。髪について最終的に表出される願望が①である。そのあとすぐに“I want to have a kitty to sit on my lap and purr when I stroke her”が来る。そして、②と③が口にされ、そのあとまた鏡の前で髪をとかしたいと言って、また“I want a kitty”があって、④が来る。

たぶん、妻は夫の都合に合わせて自己の欲求を抑えることを強いられてきたが、ついに抑えきれなくなって言いつのることになったのであろう。この女性の姿には幼さが感じられるが、男性のほうもまた理解を示し取りあう気配がない。

夫に口を閉じてなにか読むものでもとってくるように言われ、相手にされないまま、しばらく窓の外を眺めている。そのあとで、Bakerの引用していることばがほとぼりし出るのである。「とにかく猫がほしいのよ、猫がほしいのよ、猫が今ほしいのよ」「もし長い髪とか楽しみとかがだめでも、猫ならいいでしょ」といった表現である。髪型を変えることは夫の好みに合わないために妻にとって禁忌となっている。自分の食事は旅先の異国ではかなわない。雨季なのであろうか、春はまだ来ない。旅先で衣服も思うにまかせない。せめて猫ならいいでしょ。

この状況について、Bakerはこの気の毒な娘が「現実的なもの」(the actual) 対「可能的なもの」(the possible) のフェース・オフのレフェリーであると言う。こういう言い方はいくぶん滑稽でなくもないが、この「現実的なもの」と「可能的なもの」のあいだに猫(the cat)が位置すると続くのである。そして、その猫(It)が最後に宿の主人のやさしい老人によって届けられる。

この文脈で、代名詞の“It”はその直前の定冠詞付きで現われる“the cat”を受け、その“the cat”は妻が「とにかく猫がほしいのよ」と言ったときの不定冠詞付きの“a cat”を受けている。Bakerの理解では、妻が窓から見かけて連れに行ったとき姿を消していたあの猫でなければならないとは考えていない。妻が「とにかく猫がほしいのよ」と行ったときに考えられているのは、もはやあの特定の猫ではなく、すでに猫という種である。Bakerが定冠詞付きで用いた“the cat”は妻の用いた“a cat”を受けたと言ってもいいし、あるいは、自身が“the actual”“the possible”と抽象的な表現を用いたから、その両者のあいだに介在する猫もそれらに見合って総称の“the cat”となつ

たと言ってもいい。

猫をほしがる妻のところに猫が届けられたのであるから、そのこと自体はめでたいことであるけれども、それが自身の夫によってでなく宿の主人によって実現したことは、そのめでたさに多少の屈折を与えないではないであろう。たぶん、Baker もそう読んでいる。ついでながら、夫が妻に口を閉じてなにか読むものでもとってくるように「穏やかに」(mildly) 言ったと Baker は記しているが、これは Baker の読み込みで、原文にこの副詞はない。さらに、この作品が男女の関係を扱う短篇の1つであることを言いながら、女性の欲求を「非合理的願望」(irrational yearnings) と言ったり、引用冒頭で「“Cat in the Rain” は男性がちょっとしか接触を持たない女性の世界の一隅を提示する」と言ったり、「猫がなぜか (somehow) 妻の頭の中では快適なブルジョワ家庭性を表している」と言ったりしているところは皮相浅薄である。これはたぶん Carlos Baker という人を露呈してしまっている。

妻は最後に「とにかく猫がほしいのよ」と口ばしるけれども、こういう場合の表現のつねとして、文字どおり猫であればなんでもいいというわけではないであろう。文字どおりにしか読めない人には「化け猫」でもいいかと茶化せばすむ。

そういう次第で、たぶん、Baker はメイドが届けた猫と妻が窓から見た猫とが同一であると考えていたわけではないであろう。そうではなく、猫は当然違うけれども、猫には違いないから、宿の主人の厚意を認めているのであろう。もう少し慎重に言うと、Baker が猫の同一性を前提にしていたという Lodge の考えは保証がない (unwarranted) ことになる。この言い方は、しかし、つぎの問題である。

2

結末の“a big tortoise-shell cat”について、Lodge が Baker の読みと考えるものに対置して提出した読みは、ただ一般的な可能性として対照的な読みを提示してみたというだけであろうか。もちろん、Lodge はそこで断定しているのでなく、suggest/might infer/would make というような語句が示すとおり、推測しているのである。この方向に沿えば、当然、結末は happy ending でなく ironic ending となるであろう。メイドの届けた猫がわざわざ

“big”と形容されているのは、①“kitty”という指小語で指示し、②膝の上に乗せて撫でてやるところを思い描いている、そういう猫とは違うことを暗示している (suggest) と言う。さらに加えれば、雨の中の公園のテーブルの下にいかに頼りなげにうずくまっていた憐愍と同情を誘う猫 (だから “the poor kitty” と妻は言ったのである) の像とも調和しにくい。そして、届けられた猫が妻に対してどのような作用を及ぼすかについては推論の域に属するけれども、その推論の行為はテキストそのものに要請されるものであって、それを避けるなら、この作品を読んだことにならない。

Lodge が対置した対照的な読みは Lodge 自身の読みでもあると考えていい。さらに先へ行って、Lodge は John V. Hagopian (1962; 1964; 1975) を引いている。

The girl's symbolic wish is grotesquely fulfilled in painfully realistic terms. It is George, not the padrone, by whom the wife wants to be fulfilled, but the padrone has sent up the maid with a big tortoise-shell cat, a huge creature that swings down against her body. It is not clear whether this is exactly the same cat as the one the wife had seen from the window—probably not; in any case, it will most certainly not do. The girl is willing to settle for a child-surrogate, but the big tortoise-shell cat obviously cannot serve that purpose. (Hagopian, 1975: 232)

ここで Hagopian は「メイドの届けた猫が妻の窓から見た猫と同じかどうかは明らかでない——たぶん、同じではないであろう」と言った上で、「いずれにしても、この猫では用をなさないことがきわめて確かであろう」と推量している。ここまでのところは、Lodge が Baker の読みと考えたものに対置して見せた読みとほとんど同じである。もし同一の猫であったとすれば、雨のなかに見たときの姿との違いのように、妻は呆然とすることになる。

この “a big tortoise-shell cat” について、一方に Lodge が Baker の読みと考える受けとめ方があった。他方に Hagopian の受けとめ方 (それは Lodge の受け止め方でもある) があった。だから、Lodge は一貫して猫の曖昧にこだわることになっていた。実際には、しかし、猫の実体についての曖昧は幻想で、猫が妻に及ぼす結果が曖昧であると言うべきである。

しかし、そうではなくて、猫の実体があくまで曖昧であると主張するのが大沼（1987）である。この論文はある雑誌の「文学の文法」と題する特集のために執筆されたもので、言語学の知見が文学テキストの読みにどれだけ貢献するかを実地に試みるという期待に答えていると言っている。“Cat in the Rain”の猫の同定の問題に絞って、とくにこの問題に決定的な関係を持つ2点について論じ、最終的にこの猫の同定は確かめられないという結論を出す。それに加えて、猫の同定にかんしては断定不能であると明言した Lodge に軍配を上げざるをえないとも言っている。詳細に論じられる決定的関係を持つ2点というのは、① kitty という語の語用、②物語における人物の視点、のことである。②については Lodge が行なった議論を事実上跡づけていて、それがあって Lodge が断定不能としていると判断することになったのであろうと思われる。

第1の点、kitty について。

この kitty というのは幼児語（baby talk）といわれるスタイルの英語で使われるもので、幼児が使ったり、幼児——特に自分の子供に対してよりも他人の小さい子供に対しておとなが使ったりするのをその典型例とする。成人の英語では、cat, little cat, kitten などを使うのが普通である。
（大沼，1987: 87）

妻が雨の中に見た猫のことが最初に言及されるのは地の文においてで、ここでは cat という語が使われていた。ところが、その猫のことを妻が夫に向かって言うときに、kitty という語を用いたのであった——“I’m going down and get that kitty.”

……kitty という幼児語をこの女性が……何度か口にしているということに、通例の慣行からのズレが示されているわけで、そこから、この女性の、たとえば小児性とか感情面での不安定性といったものを読者が推論することを可能にする。
（大沼，1987: 88）

そういうわけで、kitty という語によって指示されているからといって、それが“a big tortoise-shell cat”と異なる猫であることを示す根拠にならないと

言うのである。これについては、のちに立ち戻ることにして。

第2の点、人物の視点について。物語や小説にかぎらないが、とりわけ物語や小説には視線・聴線・思考線といったものがある、これまで気づきやすく問題にされることの多かったのが視線（あるいは視点）であった。大沼も、その基礎になった Lodge も、この作品の視線のあり方を丁寧に追ひ、それが最後の場面で決定的な意味を担っていることを確認する。Lodge を引く。

We can now fully understand why the ending of the story is so ambiguous: it is primarily because the narration adopts the husband's perspective at this crucial point. Since he did not rise from the bed to look out of the window at the cat sheltering from the rain, he has no way of knowing whether the cat brought by the maid is the same one—hence the non-committal indefinite article, 'a big tortoise-shell cat'. If, however, the wife's perspective had been adopted at this point and the text had read,

'Avanti,' the wife said. She turned round from the window.

In the doorway stood the maid. She held a big tortoise-shell cat . . .

then it would be clear that this was not the cat the wife had wanted to bring in from the rain (in which case the definite article would be used).

(Lodge, 1981: 29)

だれかがドアをノックした。「どうぞ（おはいり）」と夫のジョージが言う。読んでいる書物から顔を上げた (looked up)。そして、その視線に捉えられたのが、戸口に立っているメイドであり、その胸に抱きかかえられた大きな三毛猫 (a big tortoise-shell cat) の姿であったと言うのである。夫はベッドに枕を2つ重ねて寄りかかった状態で読書が続けていて、そこを離れることがなかったであろうから、たぶん窓からテーブルの下で雨を避けてまわっていた猫を見ることはなかった。したがって、メイドが届けた猫を見たとき、それが雨の中にいた猫と同一であるか同一でないか判別のしようがなかった。それで、この夫の視線に捉えられた猫を示す表現としては、不定冠詞付きの "a big tortoise-shell cat" となるしかなかった。夫にとっては初めて見

る猫だったのだ。それに対して、もし妻の視線に捉えられた猫であったら、瞬間的に同じ猫であるか違う猫であるかが判別され、同じ猫であれば定冠詞 *the* が用いられ、違う猫であれば不定冠詞 *a* が用いられることになる。この議論はわれわれの持っている知識と手法を實に見事に運用して見せた議論であるように見え、そのように評価されてきた。

以上2点を根拠に大沼は猫の実体は断定不能であると言い、第2の視線についての Lodge の見事な議論の展開から当然 Lodge も断定不能を明言しているものと判断し、賞賛することとなった。

しかし、Lodge については、そのように割り切れない様相がある。Lodge にとっては、自身が Baker の読みと考えたものが厳然としてあったから、猫の同定について曖昧が前提とならざるをえないように思えた。そこで、この曖昧の由来をpushしようとした。1つには、そもそも、この短篇が伝統的な決着のプロットの話の装いつつ、啓示のプロットの話であることが基底にあると考えられること。もう1つが、結末の言説が猫の判別のできない夫の視線を借用していること。この2点が考えられる主要なものであった。ただ、Baker が猫の同一を前提していなかったとすれば、Lodge において未分であった「結末の曖昧」から、猫の実体の曖昧が消え、大きな猫が妻に引き起こす反応の曖昧が残ることになる。

Lodge が「結末の曖昧」ということばを繰り返しながら、大沼の言うように割り切れていないのは、結末の視線の論証の直後にこのようなことを言っていることからわかる。

Carlos Baker's assumption that the tortoise-shell cat and the cat in the rain are one and the same is therefore unwarranted. Hagopian's reading of the ending as ironic is preferable but his assumption that the wife's desire for the cat is caused by childlessness is also unwarranted.

(Lodge, 1981: 29-30)

Lodge が実際に言っているとおり、結末の曖昧の主たる原因が夫の視線を借りた叙述にあるとした上で、2匹の猫が同じ猫であるとする Baker の前提（と Lodge が考えるもの）が根拠のない (unwarranted) ものであるとするのであれば、同じように、2匹の猫が違う猫であるとする自身やたぶん違う

とする Hagopian の前提もまた根拠のないものであるとしなくていいか。しかし、Lodge はそのようには言わないのである。たぶん違う猫であるとする Hagopian の解釈のほうがいい (preferable) と言っていて、またしても根拠がない (unwarranted) として退けられるのは、子供の誕生を欲しているのに叶えられない妻という Hagopian の想定の方である。さらに、子供の代理としての猫は一種の文化的なステレオタイプと認められているから可能な解釈であるとも言っている (Lodge, 1981: 30)。

この矛盾とも見える言説はなにを意味しているか。たぶん、直前で果たした夫の視線の論証が、猫の確認不能を論証する決定打でないということなのだ。物語や小説には構成にいくつかの層がある。登場人物同士のレベルがあり、その人物と行為を語る語り手とそれを受ける聞き手のレベルがあり、さらに含意された作者と含意された読者のレベルがあり、さらにその外部に生身の作者と遅れて来る生身の読者のレベルがある。メイドとメイドに抱きかかえられた猫の姿が夫の視線に捉えられた姿であることは確実であるけれども、それはまた語り手によって (あるいは含意された作者によって) 支持されているのである。登場人物の視線 (この場合のような) とか思惟 (描出話法で提示されるような) とか言っても、それらは「語り手—聞き手」あるいは「含意された作者—含意された読者」の枠内でその支持と支配を受けている。夫の視線によって判断された、①大きい、②三毛、という猫の特徴も、そのまま語り手あるいは含意された作者の支持する特徴である。語り手あるいは含意された作者のレベルで、猫のことがずっと話題になっただけで、見ればだれの目をも惹くに違いないきわ立った特徴がその過程で言及されることになかった不自然を解消するには、猫が別の猫だったと判断するしかないのである。

大沼 (1987) は kitty が幼児語であり、かならずしも仔猫のみに使われるのでなく、一般の猫についても使うことが可能な語であることを教えてくれる。最近の辞書の記述も、たとえば

kitty n. (infml) (used by or to young children) cat or kitten [*Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English*]

kitty n. (used esp. by or to children) a cat or KITTEN [*Longman Dictionary of Contemporary English*]

のようである。それでもなお、kittyはkitten（仔猫）の尾部削除形のkitに指小辞-y（親愛を示す）の付いた形であることは忘れられていない。catとkittenあるいはcatとkittyとの関係は無標の猫と有標の猫の関係である。対象が仔猫でなくてもkittyを使うことは可能であろう。それにしても、それも幼児の位置から見られた「かわいい仔猫」の延長であり、その含意に浸潤されているであろう。

Lodgeは夫の視線の論証に付随して、標題のcatに冠詞が付いていないのにも意味があって、結末の解釈の曖昧を維持するようになっていっていると言っていた（上の引用の直後）。冠詞の機微を教えられる気がしなくもないが、それなら、Tennessee Williams, *Cat on a Hot Tin Roof*のcatに冠詞の付いていないのも、なにかそれ相応の不決定性に対応しているのであろうか。

原理的なことを言えば、意味はつねに不決定であると言わなければならないであろう。すべての言語の断片、いやすべての存在の断片すらもが、つねに曖昧すなわち多義である。それにもかかわらず、日常の読みあるいは解釈の実践の場では、曖昧、多義、意味の不決定を越えようとする意志を押し留めることができない。そして、通例、曖昧あるいは多義における選択肢は対等ではない。そう言えば、いま話題にしてきた作品の冒頭の文“*There were only two Americans stopping at the hotel.*”は「献血でエイズにはなりません」（いつかの日本赤十字社献血所の貼り紙）と同じように曖昧であった。しかし、その曖昧は続く文に目が行ったとたんに解消されてしまっている。

References

- Baker, Carlos. *Hemingway: The Writer as Artist*. Princeton, N. J.: Princeton University Press 1952: 135–136.
- Brook-Rose, Christine. “The Squirm of the True.” *Poetics and Theory of Literature* I (1976): 265–94 and 513–46, and II (1977): 517–61. Reprinted in her *A Rhetoric of the Unreal*. Cambridge: Cambridge University Press, 1981: 128–229.
- Hagopian, John V. “Symmetry in ‘Cat in the Rain.’” *College English* 24 (Dec. 1962): 220–22. Reprinted in *The Dimension of the Short Story*. Eds. James E. Miller and Bernice Slotte. New York: Dodd, Mead, 1964: 531–33; *The Short Stories*

of *Ernest Hemingway: Critical Essays*. Ed. Jackson J. Benson. Durham; Duke University Press, 1975: 230–32.

Lodge, David. “Analysis and Interpretation of the Realist Text: A Pluralistic Approach to Ernest Hemingway’s ‘Cat in the Rain.’” *Poetics Today* 1 (1980): 5–19. Reprinted in his *Working with Structuralism: Essays and Reviews on Nineteenth- and Twentieth-Century Literature*. London: Routledge and Kegan Paul, 1981: 17–32.

大沼雅彦 「「雨のなかのネコ」の文法的一面」『日本語学』6 (1987) : 83–92.

栗原 裕 「“Cat in the Rain” と解釈の問題」『共立女子大学文芸学部紀要』39 (1993) : 横組み 1–27.